いぐさの栽培は良質な「長イ」を多収するために，有機質肥料を多量に施し，密植栽培及び倒伏防止網掛栽培を行う。いぐさの伸長期や収穫期は梅雨期にあたり，浸冠水の害を受けやすく，また，晴天が続くと干害，風害，塩害を受けやすい。近年県中北部地帯に栽培地域は拡大されており，積雪の害が心配される。

1　水害

(1)長雨対策

ア　生育最盛期

5-6月の長雨は日照不足，湛水による土壌還元，肥料の流亡，生育・品質に及ぼす影響は甚大である。特に茎の伸長・分げつが抑制され軟弱となる。

この対策として，い茎を垂直に保ち，透光を良好にする。また，排水を良くし，肥料の分施回数を増し，施肥量をやや多くする。

表10　生育における湛水遮光の影響
昭和32年広島農試東部支場

試験区	茎長(cm)	茎数(本)	収量kg/a		倒伏月日	茎の軟弱
			60cm以上	105cm以上		
湛水遮光区	132	40	23.1	14.3	6月28日	軟
標　準	141	60	123.5	78.9	6月24日	やや硬

(注)　5月10日より6月25日まで，ヨシズにより遮光(自然光の1/5)
　　曇雨天を除き，日中2-7時間人工降雨処理を行ない，3-5cm常時湛水水した。

イ　収穫期

(ア)　長雨で刈取りが遅れる場合

長雨で刈取りが遅延すると根元は白化し軟らかく，「赤イ」や先枯れも多くなり，紋枯病が発生蔓延する。

a　長雨が続くといぐさの生理機能が減退するので，できるだけ排水に努め，根の活力が衰えるのを防ぐ。

b　田の土が軟らかくなれば刈取り能率が低下するので，水の溜まりやすい水田では排水に努める。

c　刈取りが7月25日を過ぎるような見通しとなれば，最終の追肥の時期と量にもよるが，7月初めに10a当たり成分で2kg位の窒素を流しこみ，肥効の継続を図る。

(イ)　刈取り後に長雨が続く場合(大型乾燥機の設置をしていない地域)

刈取り後曇雨天に遭遇し乾燥ができない時は，次の方法による。

a　泥染め前に雨天となったときは，発酵を防ぐため，いぐさを積重ねずそのままにしておくか，きれいな川水などに浸漬し，陽よけをしておくと数日間は心配ない。天候が回復すれば直ちに泥染め乾燥するが，この場合には泥染液の濃度をやや濃くする。

b　泥染後(乾燥前)に雨天となった場合は，雨水の漏らないような仮屋根を作り，周園をコモなどで覆う。ビニールシートなどで覆うのは内部が蒸れ，発酵を助長するので良くない。泥染め後のいぐさは気温にもよるが，普通2日位は変化せず3日目頃から変色が始まる。雨天が2日以上になる場合は，再度泥染めを行なって冷却を図り，屋内，天幕下において寄木に直立するように立てかけ，通気を良好にしておく。

c　半乾燥のもので雨にぬれたものは，再泥染めの効果がなく，かえって変質を助長するので，屋内で結束し，根元を広げて通気をはかり，発酵を防ぐ。また，前述の場合に雨天が2日以上続く見込みのときは，熱風乾燥機により乾燥するのも一方法である。

(2)浸冠水対策

い茎の葉鞘より上部が浸水すると泥水・汚物が付着し，刈取り後泥染めしても浸水部分は色沢不良となり，畳表の色調不揃いとなって品質が劣悪化する。排水後降雨があっても汚染されたい茎の泥土などはなかなか洗い流れないし，排水後強烈な日射に遭遇すると浸水部は萎凋する。

収穫期の到来した浸水いぐさは，できるだけ早く刈取り，束のまま清水中で汚染部をもみ洗いし泥染め乾燥する。この場合の泥染め液はやや濃くする。